



國寶 興福寺 八部衆のうち 阿修羅像

光明皇后の想いの阿修羅像

奈良の都・平城京。春の霞がゆっくりと宮中を包むころ、一人の皇后が静かに歩みを進めていた。光明皇后——藤原不比等の娘として生まれ、藤原氏の期待を背負い、政治の渦の中で生きてきた女性である。

その手には、亡き母・橘三千代の形見である数珠が握られていた。

母は、皇后が宮中で孤立し、嫉妬と疑念の視線にさらされる中、自身も孤立しながら藤原一族の権力を高め、ただ一人皇后に寄り添い続けた存在だった。

733年、母は静かに息を引き取った。

深い喪失の中で、皇后はある決意を固める——母のための祈りの場をつくろう、と。

その祈りを形にするために、興福寺の西金堂が建立されることになる。

表紙画像は 興福寺 HP から

光明皇后の想いの 阿修羅像
人々の安寧を願う、母・橘三千代と娘・光明皇后そして聖武天皇

CONTENTS

第一章	藤原不比等の妻・県犬養三千代（橘三千代）の後宮進出と政治的役割	3
第二章	藤原不比等との政治的同盟.....	3
第三章	宮子の入内と文武天皇・聖武天皇への影響	4
第四章	光明子と首親王 —— 同年に生まれた二人の運命	5
第五章	光明皇后の即位と政治的役割	5
第六章	基王の死と藤原四兄弟の死.....	6
第七章	母三千代の冥福を祈る西金堂建立	6
第八章	阿修羅像が生まれた日	7
第九章	阿修羅像の象徴性と光明皇后の心	8
	三つの顔 —— 心の三段階を語る“内面の物語”	8
	六本の腕 —— “戦いから祈りへ”変わる心の動き	9
	三面六臂が語る“光明皇后の心”	9
	阿修羅の製作工程	9
	最後に奈良国立博物館収蔵品データベース から	11

なかった能力を、持統天皇の治世においてようやく開花させていった。律令国家の整備が進む中で、不比等の法律知識と政治的手腕は重宝され、彼は持統政権の中樞へと駆け上がっていった。

二人の結びつきは、恋愛というものではなく、時代が求めた政治的同盟であった。不比等は三千代の後宮ネットワークを必要とし、三千代は不比等の政治力を必要とした。両者の力は互いに補完関係にあり、この同盟によって、皇族・藤原氏・橘氏の三勢力が結びつき、奈良時代政治の基盤が形成されていった。三千代が後宮で力を蓄えていく一方、天武天皇の時代には阻害されていた夫・藤原不比等は、持っていた能力を開花させ、妻三千代の助けもあり、持統天皇の時代になって、政治の頂点へと駆け上がっていった。三千代の後宮ネットワークと、不比等の政治力は互いに補完関係にあり、両者の結びつきは時代が要請した政治的同盟ともいえるものであった。この二人の結びつきにより、皇族・藤原氏・橘氏の三勢力が連結され、奈良時代政治の基盤が形成されていく。



持統天皇 645～703 年

第三章 宮子の入内と文武天皇・聖武天皇への影響

文武天皇が后を迎える時期になると、三千代の力は最大限に発揮された。後宮の門は簡単には開かない。その門を開く後押しをしたのが三千代であった。彼女が築いた信頼と後宮序列の理解が、宮子の入内（697年）を可能にした。そして期待通り、宮子は文武天皇との間に首皇子（のちの聖武天皇）を産む。

この瞬間（とき）、三千代は文武天皇の養育に深く関わった女性、聖武天皇の祖母、藤原不比等の妻という、宮廷で極めて強力な三つの立場を同時に手に入れた。この構造は奈良政治の中樞を形づくる重要な要因となった。彼女の静かな微笑みの裏で、奈良の未来が形づくられていく。

第四章 光明子と首親王 —— 同年に生まれた二人の運命

光明子（光明皇后）は藤原不比等と橘三千代との間に701年に誕生した。彼女は「藤原氏から皇后を出す」という一族の悲願を背負って生きる女性であった。偶然にも同じ年、首親王（聖武天皇）が文武天皇の第一皇子として生まれる。母は不比等の娘・宮子であり、光明子にとって腹違いの姉である。したがって、光明子は首親王にとって叔母にあたる。首親王は7歳で父文武天皇と死別し、文武天皇の母・元明天皇（天智天皇皇女＝持統天皇の妹）が即位した。母・宮子は心的障害に陥り、その後首親王との対面は叶わなかった。聖武天皇が病氣平癒ののち母と再会したのは、齢37のときである。

聖武天皇は病弱であり、皇親勢力と外戚である藤原氏との対立もあって即位は先延ばしとなり、715年には伯母・元正天皇が皇位を継いだ。そして24歳のとき、元正天皇から皇位を譲られて即位する。しかし、非皇族の母を持つ皇子の即位は異例であり、その権力基盤は決して盤石ではなかった。

第五章 光明皇后の即位と政治的役割

その脆弱な権力基盤を支えたのが、光明子—光明皇后であり、彼女の母・三千代であった。光明子は母・三千代の後押しと、父・不比等の政治戦略によって皇后となった。しかし、彼女自身の心は決して強さだけで、できていたわけではない。

疫病、飢饉、反乱。国が揺れ続ける中で、聖武天皇は心をすり減らし、仏教に深い救いを求めた。光明皇后はその心を支え、天皇の最も近い位置で政治を担い、母から受け継いだ感性と自らの手腕で国家を動かしていった。

彼女は「静かな設計者」であった。大仏造立という巨大な国家事業の背後にも、彼女の影響があった。



第六章 基王の死と藤原四兄弟の死

しかし、光明皇后の人生には深い影が落ちる。

神亀5年（728）。彼女の最愛の息子・基王が、わずか二歳に満たない幼さで夭折した。皇后にとって唯一の「家族としての希望」。その小さな命が消えた瞬間、彼女の心の奥に消えない傷が刻まれた。この喪失は、後に皇后が慈善事業や救済政策に力を注ぐ原動力となった。苦しむ人々を救うこと―それは、失われた息子への祈りでもあった。

そして、聖武天皇と光明皇后にとって追い打ちをかけるように、疫病による藤原四兄弟の相次ぐ死は宮廷に深い影を落とした。政務を支えてきた柱が一度に崩れ、都には不安が満ちていく。四兄弟は皇后にとって血を分けた兄たちであり、政治の要であり、家族であった。その喪失は皇后の胸にも深く沈んだ。

荒れ狂う時代の中で、聖武天皇は「鎮護国家」思想を強め、国分寺建立や大仏造立を推進した。光明皇后は、その背を静かに見つめながら、夫の孤独に寄り添った。政治的思惑から結ばれた夫婦は、いつしか互いの孤独を支え合うかけがえのない伴侶となっていた。聖武天皇にとって、光明皇后の存在は荒れ狂う時代の中で唯一の安らぎだった。

第七章 母三千代の冥福を祈る西金堂建立

天平5年（733）、母・橘三千代が死去すると、光明皇后は深い喪失感に沈んだ。母は皇后にとって政治的支柱であると同時に精神的支えでもあった。皇后は母の冥福を祈るため、興福寺に西金堂を建立することを決意する。母が愛した仏教、母が信じた慈悲の道―それを形にすることで、母の魂を慰めたいと願ったのである。

興福寺は藤原氏の氏寺であり、三千代が深く関わった場所でもあった。その西側に新たな堂を建てることは、母への最大の供養であり、皇后自身の心を支える「祈りの家」をつくることでもあった。

西金堂には釈迦如来像を中心に八部衆・十大弟子像が安置され、計28体の群像が整えられた。八部衆のうち、阿修羅像は本来戦闘神であるが、興福寺像は怒りを捨て、祈りの姿を示す静かな表情を特徴とする。後世の調査で内部に別の顔が存在することが判明し、より柔和な表情へ改作された可能性が指摘されている。この像の表現は、母の死

と子の夭折という二重の喪失を抱えた光明皇后の祈りと重ねられ、懺悔・慈悲・安寧の願いを象徴するものとして理解されてきた。東大寺が国家の祈りの場であったのに対し、興福寺西金堂は皇后の個人的祈りの場として機能した。

第八章 阿修羅像が生まれた日

734 年、母の一周忌。興福寺西金堂には、釈迦如来を中心に八部衆・十大弟子、合わせて 28 体もの像が並んだ。その中に、ひときわ静かに佇む少年の姿があった。阿修羅像である。本来、阿修羅は戦いの神。しかし、この阿修羅は怒りを捨て、胸の前でそっと手を合わせている。三つの顔は、怒り・悲しみ・祈りへと移ろう心の変化を映し、六本の腕は戦いの力を祈りへと転じた証のようだった。

阿修羅像が造られた時、皇后の心にはもう一つの深い傷があった。728 年―皇后の最愛の息子、基王がわずか二歳に満たず亡くなったのである。皇統を継ぐはずの希望。夫・聖武天皇との間に生まれた、唯一の“家族としての幸せ”。その喪失は皇后の心を深くえぐった。

後世の CT 調査で、阿修羅像の正面の顔の下に別の顔が隠れていることが判明した。「より優しい表情に作り直されたのでは」「夭折した基王への想いが込められたのでは」そんな説が生まれたのも、皇后の人生を思えば自然なことだった。

阿修羅の静かな祈りは、母を失った娘の祈りであり、息子を失った母の祈りでもあった。本来、阿修羅はインド神話で帝釈天と戦い続ける戦闘神だが、興福寺の像は憂いを帯びた静かな表情をしている。それは、仏教に帰依し、自らの過ちを悔い、悟りを求める「懺悔（さんげ）」の姿を表現しているとも考えられている。



興福寺 西金堂跡

第九章 阿修羅像の象徴性と光明皇后の心

三つの顔 — 心の三段階を語る“内面の物語”

阿修羅像の三面は、単なる造形ではなく、人間の心が苦しみから祈りへと変化していくプロセスを象徴すると理解されてきた。

● 怒りの顔（右の顔）（向かって

眉を吊り上げ、口を固く結ぶ表情は、インド神話の「戦いの神」としての名残をとどめる。争い、嫉妬、執着—“煩惱の象徴”とも捉えられ、光明皇后が見てきた宮中の争いや、藤原氏の期待に縛られた幼い日の葛藤を重ね合わせる解釈もある。

● 悲しみの顔（左の顔）

目を伏せ、沈んだ口元は深い内省を示す。戦いに疲れ、苦しみを抱えた姿とも捉えられ、『金光明最勝王経』に説かれる「懺悔」の段階を象徴する。母・橘三千代の死、息子・基王の死、国家の混乱—光明皇后が背負った深い喪失を重ねて、理解されてきた。

● 祈りの顔（正面の顔）

中性的で澄んだ表情は、怒りや悲しみを越えた「祈り」の境地を示す。「母よ、安らかに」「息子よ、どうか救われよ」「国よ、争いを捨てよ」光明皇后の祈りが最も反映された顔として、多くの研究者が注目してきた。

また、右の顔を少年期、左の顔を思春期、真中の顔を青年期と年代的なプロセスと考える学者もいる。



六本の腕 ― “戦いから祈りへ”変わる心の動き

六本の腕は武神としての力を誇示するためではなく、心の葛藤と変化を象徴する。

● 戦いの名残

多腕はインド神話の武神の特徴である。しかし興福寺の阿修羅は武器を持たず、戦いを捨てた姿として日本独自の解釈が生まれた。

● 葛藤の多さ

六本の腕は、心に渦巻く複数の感情を象徴する。怒り、悲しみ、迷い、希望、懺悔、祈り。
腕の動きが左右で異なるのは、揺れ動く心そのものを形にしたためともいわれる。

● 祈りの姿勢の強調

正面の二本の腕は胸の前で軽く合わせ、残りの四本は静かに垂れる。激しさを捨てた“静寂の構成”。戦いの神が祈りの存在へと変わる瞬間を表している。

三面六臂が語る“光明皇后の心”

阿修羅像は、光明皇后の人生と重ねて理解されてきた。母の死。息子の死。国家の混乱。夫・聖武天皇の苦悩。自らの罪責感。そして、民を救いたいという切実な願い。

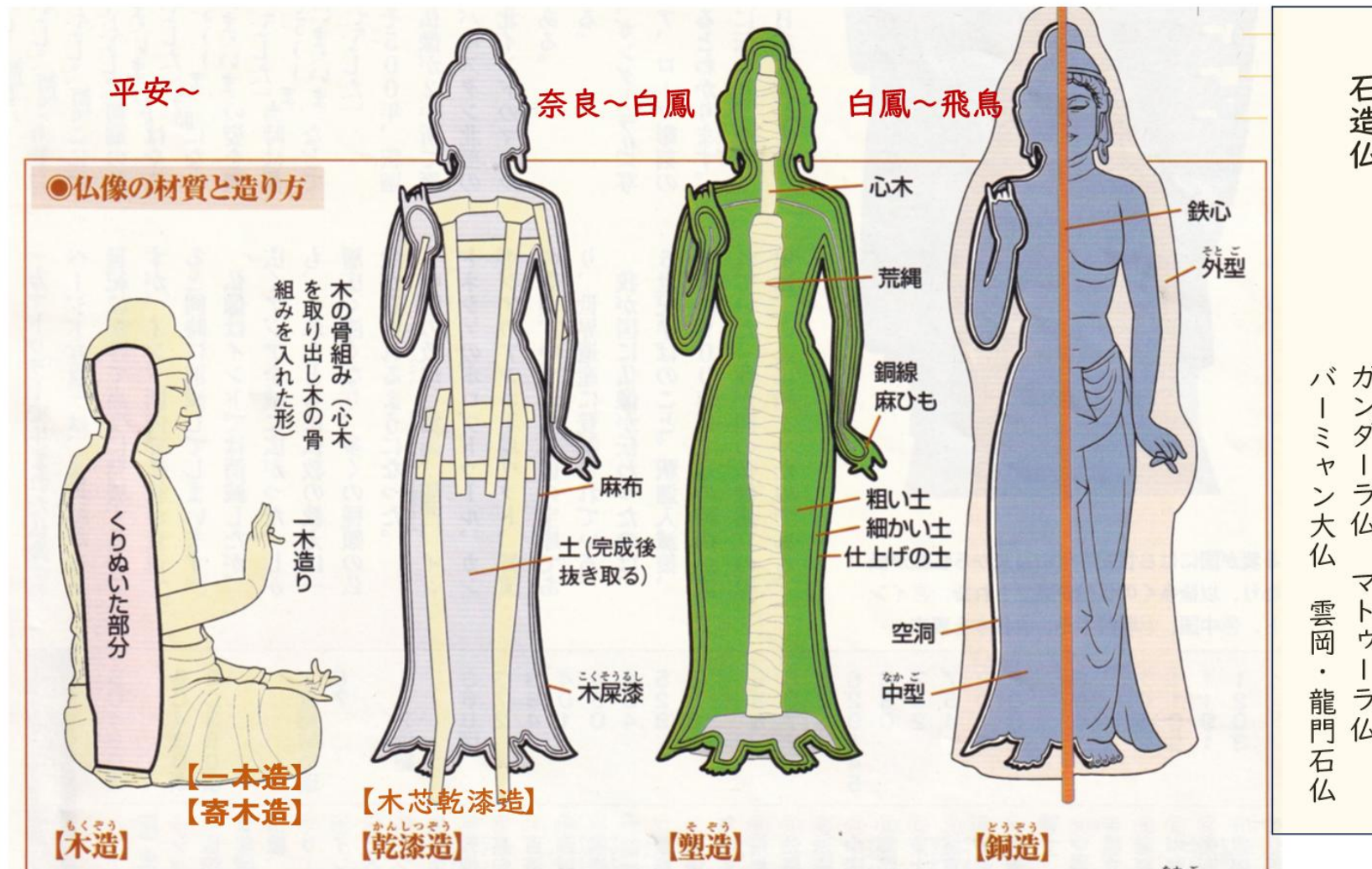
阿修羅像は、“戦いの神”ではなく、“祈りの神”として再生した存在。
その静かな祈りは、母を失った娘の祈りであり、息子を失った母の祈りでもあった。

阿修羅の製作工程

最後に阿修羅像の技法について図解とともに簡単に触れておく。

阿修羅像は脱活乾漆造（だっかつ かんしつづくり）で製作されている。粘土の型の上に麻布に漆を塗り乾燥させ、更に何度も貼り重ね、中の土を抜き出す技法で作られており、非常に軽く、繊細な表情表現を可能にした。

下に示した図は、各時代の仏像の作り方の概略を示したものの。



仏像の作り方の変遷

最後に奈良国立博物館収蔵品データベース から

興福寺阿修羅立像（模造） Ⅰ 軀

文・画像ともに 奈良国立博物館 収蔵品 データベース

1997 年 森村欣司氏 撮影

脱活乾漆造 彩色。像高 153.4 cm

彫刻 昭和 56～61 年 1981～1986 年奈良・興福寺八部衆像（奈良時代、国宝）のうち、阿修羅の往時の姿を復元した模像。

像の復元は公益財団法人美術院によって行われ、彩色は六法美術が担当した。現品は天平六年（七三四）創建の西金堂に安置された八軀(く)で、同寺十大弟子像（奈良時代、国宝）とともに仏師将軍万福により造られ、彩色は秦牛養（生没年不詳）をはじめとした絵師集団が手がけた（『正倉院文書』）。

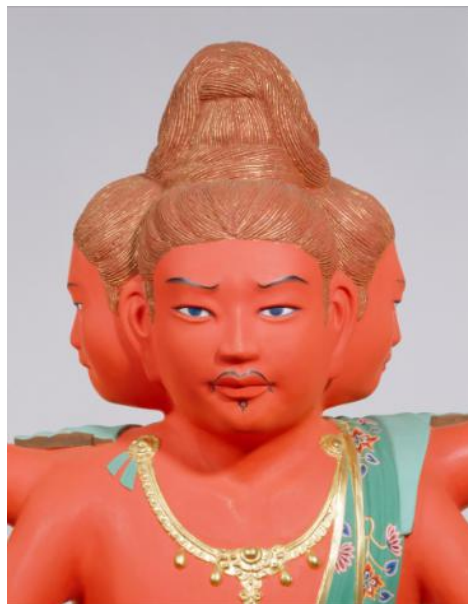
本像の彩色は原品の表面層の観察に基づくもので、身色は鮮烈な赤色で彩られ、下半身の裙(くん)には暈縹彩色(うんげんざいしき)による団花文(だんかもん)が散らされる。八部衆像は承暦二年（1078）と貞永元年（1232）の二度補彩されており、いま現品に残る彩色は大半が後者のものと考えられている。本像で再現された彩色部分も鎌倉時代の補彩とみられるが、文様の手法は奈良時代に淵源が求められるもので、文化庁（奈良・額安寺旧蔵）虚空蔵菩薩像のように、補彩の対象が天平の古像であることを意識した上でこうした文様が描かれたと想像される。

貞永時の補彩は絵所大仏師寺主蔵慶をはじめ 15 名の絵仏師によって行われたが、これに参画した重命は文永九年（1272）完成の東京・世田谷山観音



寺不動明王および八大童子像の彩色など南都での活動が知られる絵師で、この補彩が重命のいま知られる最初の事績である。

なお、八部衆像のうち迦楼羅の袴の一部には当初の彩色が残っており、白土下地の上に赤系と緑系の暈縞彩色による唐花文を描き、これらを赤色で縁取る様は奈良時代の手法をよく示す。本像の補彩に関わった絵仏師たちも、こうした実例から天平の彩りを学んだのかもしれない。



文責：さんさん会（芦屋川カレッジ 33 期）・同好会 さんさんヒストリア リーダー 小林 猛